

問題提起 I

苦の臨床という「現場」

ひとさじの会事務局長 吉水岳彦

1、はじめに—出家僧侶にとっての「現場」とは？—

日本の出家僧侶にとって、いったい何が「現場」なのであろうか。「僧侶」を職業として考えれば、死者の年回法要や葬送儀礼を執行したり、寺院を運営したり、依頼された法話したりする場面が「現場」なのかもしれない。しかし、仏門で出家して「僧侶」になることを生き方として選択した者にとっての「現場」は、そのような場面のみに限られるものではないだろう。仏陀ご自身が「人生は苦である」との認識の上でさとりの道を歩まれ、数多くの絶望した者の受け皿となったように、生・老・病・死にまつわる一切の苦や煩悩に振りまわされ、苦悶し続ける自己や他者と向き合うあらゆる場が「現場」であり、仏門の僧侶にとっての臨床の場といえよう。

加えて、僧侶の行う教化活動は、苦の臨床に立つことで、自己のあり方を問われ、葛藤し、苦悩するうちに学びとった知見を世間の人々と分かち合うことであり、その上で、自身が心底から求めるさとりのや救いの道を「共に歩もう」と声をかけていくことであろう。

ここでは、まず「出家僧侶」とはいかなるものかを確認し、その上で、苦に満ちた世界を生きるすべての人々と、お互いに支え合い、共に済い合おうと励む僧侶・臨床佛教師としての自己の「現場」を紹介していく。未熟な点も多いと思うが、これからの時代に苦の臨床としての「現場」に立つ僧侶とはいかにあるべきかを考える材料にしていただければ、幸いである。

2、そもそも出家僧侶とは？

①佐々木閑先生『「律」に学ぶ生き方の智慧』より

○「世俗の生活を捨てて出ていく」という言葉が「出家」

→ 世俗の生活を捨てて出て行って、佛教などの特定の宗教世界の修行者になって暮らすということ

→ 今の生活を放棄したい！まったく別の生き方に切り替えたい！と思う者が出家する。

→ 「自らのちを断つ」「世捨て人になる」という選択以外の、第3の選択である

→ 同じ気持ちを持つ者が集まって集団をつくり、世俗の価値観とは違う自分たちが求める独自の世界観で生きる社会をつくる人々

釈尊の言葉「自らを島（燈明）として、法を島（燈明）として生きよ」

言わば出家者は、釈尊の生み出した「島社会」の住人！

○生きる苦しみにさいなまれている人たちに、自分の辿った道を示すことで救いの手を差し伸べた釈尊

- 世俗の価値観とは違う、釈尊の価値観の世界に飛び込んでいくのが「佛教の出家」
- 出家した者は、自分を向上させたいという修行を好きなだけすることができる。
- 絶望していた人が、新しい生き方を手に入れて、もう一度人生をやり直すことができる「救済の場」が佛教サンガ！！

②日本の出家僧侶の時代的变化

- ・明治5年 「肉食妻帯蓄髪勝手たるべし」布告
 - 出家を身分から職分に変更し、特権を廃止し、世俗化を促進
- ・寺院の世襲化が進む
 - 古典芸能のように、良質な僧侶の資質が受け継がれる場合もある
 - 師弟ではなく、親子の関係に変化→「家業」の継承という意識に……
- ・出家者は新たな信者や徒弟を育て、教義や作法の師とならねばならなかったが……。
 - 現代の僧侶の多くは、「檀家制度」に安心して寺院檀信徒の葬送や追善回向に終始して、積極的に檀信徒外の人々へ布教することは少なく、徒弟も少ない。
 - 人口は減少し続けていて、2021年の一年だけで自然に減少した日本人の数は60万人を超えている。今後、確実に檀信徒の数は減り、教えを継承する者は減少する。

◆僧侶とは、僧侶の血族しかねないもので良いのだろうか？

◆僧侶や寺院は、在家から新たに出家する存在を積極的に受け入れ、念佛者として生まれ変わりたいと思う者を育てる受け皿とならなくてもよいのか？

◆僧侶の役割や出家の意義とは、自身が住持する寺院を守ることだけなのであるだろうか？

◆僧侶の役割は、佛法、とりわけ念佛に依る阿弥陀如来様の救いの道を人々に教え弘めることではないのだろうか？

③ある僧侶からの問い

「篤信の在家仏教徒と現代日本の出家者は何が違うのでしょうか？よほど、篤信の在家信者の方が僧侶らしいのではないか？」

○上記の問いを発した僧侶の眼にした悲しい現実

葬儀や法事の時だけ僧侶の格好をして佛教を語るが、日頃の生活では戒律を守らず、品位もなく、金銭による布施収入の話と美味しい居酒屋や遊びの話ばかりで、人々の苦しみに向き合おうともしない僧侶たちに違和感を強い違和感を覚えて……。在家から出家して努力してきた彼は、現実の僧侶のあり方に矛盾と失望を感じたのです。

○現代の僧侶は、何を以て出家というのか？

寺に住み、お布施の多寡を気にするばかりで、葬儀や法事以外に経典を読むことなく、佛法を自発的に学んで他者に伝える努力をせず、世間の人々の心身の苦しみや幸福に無

関心。身内を喪って悲しむ人に、法を説く以前に戒名や読経の対価として多額の金銭を要求するなど……。→ 僧侶とは似て非なる者ではないか???

○一方で、篤信の在家信者の姿は、

一般的な仕事をしながら自ら時間を作って念佛や読経等の修養を積み、困っている人がいれば財施を含めてできるかぎりの手助けを為し、時には佛法の大切さを周囲の在家者に伝えようとする純粋な信仰生活を送る人々の方が、よほど僧侶よりも僧侶のように見えてしまう……。

◆佛法の尊さを伝える際、その言葉の信憑性は、どちらの方が高く感じられるでしょう？
伝道や教化活動を主にするとしても、僧侶としてのあり方は大切なのでは？

☆「救いの要件」≠「出家の要件」

法然上人ご法語「現世をすぐべき様は、念佛の申されん方によりてすぐべし」

在家も出家も、婚姻・妻子・財産の有無も、無智も有智も、持戒も破戒も善悪も、すべてを超越して如来様は衆生を一人ももらさずに救ってくださる。だが、これは阿弥陀如来様が私たち一人ひとりの為にご用意くださり、お釈迦様が選び遣し、諸佛たちも讃歎証明してくださった選択本願のお念佛は、あくまでも「救いの要件」です。「出家の要件」とイコールではありません。「出家僧侶」とは、あくまでも自分自身の生き方として自分で選択するものであり、選択した以上、僧侶となれば「出家として生きるための要件」を自ら満たしていく責務がある。

3、「臨床佛教」とは？

①絶望する人に向き合うのが佛教者

・ 釈尊の佛教を専門とする学者佐々木閑氏

「釈迦の仏教が絶望した人を引き受ける受け皿だとすれば、日本仏教も同じように絶望した人を救わねばならない」(『無葬社会—彷徨う遺体 変わる仏教』鶴飼×佐々木対談)という。

・ 八宗の泰斗 福田行誠上人の言葉

「佛教者の本願は、下化衆生の一点にある」

→いかなる凡夫であろうとも、大乘佛教を信奉する者であるかぎり、「佛陀大慈悲の聲に倣う」ことが求められる。

→上記のように、出家僧侶といいながら、出家僧侶としての生き方や実践ができていないと言いき難い現実を問うように提唱されたのが、苦の臨床という「現場」に立つ佛教僧の本来のあり方を喚起する「臨床佛教」

- ・そもそも「大乘仏教の精神」とは、「上求菩提 下化衆生」
言いかえれば、「他者とのかかわりによる自己完成」（石上善應先生訳）といえる。

→ すなわち、

社会の諸事象と密接にかかわる Socially Engaged Buddhism

自己の内面と密接にかかわる Spiritually Engaged Buddhism

この両者が車の両輪の如く行われる「臨床佛教」は、「伝統仏教」と目指すところは重なっている。

- ・佛教学者 中村元博士の想い

「宗教による社会活動の要請されることが、今日ほど切実な時代はない。それにも拘わらず、かかる活動は決して十分に具現されていない。仏教では慈悲の理想は説くけれども、それをいかに実践すべきかということについて、仏教教団あるいは仏教学は適切な指示を与えてくれない。これは今日の仏教の致命的な弱点である――」（『慈悲』より）

→ この中村博士の苦悶の問いに応え、世間の人と共に仏教の現代的意義を再考するべく臨床佛教研究所より提唱されたのが「臨床佛教」という概念とその具体的な実践

②臨床佛教師の主な活動現場

- 病院（急性期病棟&緩和ケア病棟）
- ホームレス状態の方を含む生活困窮者の居場所
- 災害被災地（被災遺族などの集い場）
- 自殺自死の念慮者、及びその家族や遺族の集い場
- 虐待やネグレクトの当事者や親の集い場
- ひきこもりの当事者や親の集い場
- ケアワーカーのセルフケアの場 などなど

※ 上記の集い場は、公的施設も含む

※チャイルドヘルプラインの構想のように、今後は、電話だけでなくネット上で苦を訴える者にかかわろうと駆けつける「現場」も重要になるだろう。

◆日本の歴史的・構造的な問題から不活性化している「伝統佛教」が、息を吹き返し、広く人々の苦に向き合うようになるためにも、この世の苦しみの中で絶望する人と向き合い、苦の臨床という「現場」を意識して宗教者・佛教者として自覚的に生きる「エンゲイジド・ブディスト＝臨床佛教師」が求められているのである。

☆苦の臨床という「現場」を意識することは、現代を僧侶として生きる上で極めて重要なことではなかろうか。

4、現代の僧侶・臨床佛教師としての私の「現場」

私の基本となる3つの活動現場と組織

- ひとさじの会— 為先会メンバーが母体の社会活動の団体
- 為先会 — 学生時代に友人と結成した念佛会
- てるふる — 為先会メンバーが母体の教化・出版の団体

- ・困窮者や孤独を抱える人たちの苦に向き合う現場
 - 自己が問われ、無力な自己を教えられる
- ・念佛・法要・法話の実践という現場
 - 自他の苦を無条件に受けとめていただく
 - 佛と法と僧に会う
- ・研究・教化・伝道・執筆という現場
 - 世間の人々に共通する苦悩に向き合うための
 - 佛法を探究・発信・共有する

①ホームレス状態の方々に会う活動—ひとさじの会—

- ・「貧しい人たちのためにお墓が欲しい」という相談 —衣食住よりもお墓なの？
- ・新宿中央御公園の思い出 —都心なのに救急車を呼んでも運ばれない人がいる現実
- ・アパート暮らしから路上に戻る人々 —テレビやエアコンがあっても……。
- ・生活保護受給者の孤独 —遊んでいるとのレッテル・世間からの無理解と隔絶しやすさ
- ・葬送支縁の大切さを学ぶ —来世でも一緒にいよう、現世でも共にあろう
- ・コロナ禍での活動—おにぎりからお弁当へ・ボランティア受け入れ中止・少数で配食
- ◆路上のおじさんたちは、わたしたちの先生のように、人生における大切なことや、人として生きる上で欠かせないものを教えてくれた
- ◆表面的には、わたしたちが支援をしているようで、実は多くのものをいただいている
- ◆活動が続いているのは、出会う中で聴かせていただくおじさんのお話や手のあたたかさのおかげ

②震災や津波の被災地域にて—貧困と共通する課題—

- ・避難所でのお留守番と現地調査—現地の僧侶の地域での信頼のおかげで託されること
- ・安心の「場」の支援 —避難して一言「寺の本堂の建て替えに高い金を払って良かった」
- ・仮設住宅での慰霊と供養 —目に見えぬ存在とのつながりの肯定と孤立の予防
- ・気仙三十三観音霊場再興プロジェクト—日本古来の宗教性とグリーンワーク
- ・石巻いのり大佛建立プロジェクト—あらゆる感情を受けとめて下さる如来様を迎える

◆災害は一瞬で、大勢のホームレス状態の人々をつくってしまう。多くの喪失を経験した方々に必要なものは衣食住でありながら、そこにこめられた想いを聴かせてもらう。

③「在日ベトナム佛教信者会」と「随縁禅室」との協働

- ・中野区「ねこのて」子ども食堂にゆく — 10品ものベトナム料理を全力で用意！
 - ・「3 tの米を買う」という急な電話—困窮する留学生や技能実習生のために
 - ・「安い寝袋じゃダメ！！」—夏でも冬でも使える寝袋でなくては意味がない！
 - ・難民としてのいのちがけで日本に来て……。苦しい時を共にした友とお寺で再会
 - ・呼吸のように誰かのために尽くす—功德を積むボランティアは自発で楽しく、当たり前
 - ・在日ベトナム人技能実習生の困窮 — コロナ禍で食も住まいも失う人々の多さに驚く
- ◆海外の佛教徒と日本の佛教徒が、共に活動することで相互に学び合えることの大切さ
- ◆外国籍の学生たちや技能実習生たちの不安定な生活実態を教えられる
- ◆佛法を実践するのに国も人種も関係ない。苦しむ人を前に宗教の異なりも関係ない

④たましいの孤独を感じているのはホームレス状態の人のみか？—子どもの貧困と孤独—

- ・ホームレス状態の方々の孤独は子どもの頃からか—ネグレクトや虐待家庭での経験
- ・こども極楽堂の設立—たましいの孤独と食の貧困をかかえる子どもたちの居場所
- ・NPO 台東区の子育てを支えるネットワーク—山谷における無償学習支援と子ども食堂
コロナ禍で子ども食堂は「無料食品配布」
- ・あむりた—看護や介護等で疲れた方々の愚痴を出せる場所
- ・下町グリーンサポート響和国—子どものグリーフをみつめる

グリーンケアライブラリー「ひこばえ」の開設

- ◆バンドエイドを貼るようなホームレス状態の方々への支援の中で、予防的な活動を考えた末に、あらゆる孤独の人たちのことを考えた「支縁」を考えるようになった
- ◆虐待やネグレクト、貧困、いじめ、失職、家族の不和、親しい人との死別など、子どもの頃から苦しい思いをしてきた路上に住むおじさんたちの姿は、いま苦しい思いをしている子供たちの姿と重なる。
- ◆「助けて」というのは大変なこと。すがりついて殴られた経験を持つ人には、なお難しいことであろう。子どものうちから安心して頼っていいと思える場を設けることが大切であろう。

⑤病院やご自宅を訪問してのスピリチュアルケア

- ・「なんで私がこんな形で死なねばならないのか？」 答えのない問い
- ・「ねえ、お父さんが夢に出てくれない。死んだあとはどうなっちゃうの？」
- ・「私のことは、もう阿弥陀様にお任せしてあるの！」—信仰を得ることでの安心と緩和

- ◆身体の痛みが落ち着いたときに生じる心の奥底に痛みは生じる。
- ◆すべての人間は、生まれた以上、いつか死ぬんだと分かっている、自分の死が目前に迫ったとき、果たして素直に「そうですね」と受けとめられるものであろうか。否、死を目前にした人間の感情は、どんな合理的・科学的な答えをもってしても納得させることはできない。
- ◆そんな患者の隣で話を聴くときに必要なのが宗教や祈りであり、宗教を知ること・持つことによって、他者の信仰を真に尊重と寛容をもって接することができるのである。

5、自己の行うあらゆる活動の母胎「為先会」一苦の臨床という「現場」に身を置くために

- ◆如来様は、無力感に打ちのめされ、時に醜い感情に支配される私の心を、いつもありのままに受けとめてくださる。だからこそ、苦の臨床という「現場」に身を置ける。
- ◆信仰を持って活動するから
 - 自己の信じる宗教を持つからこそ
 - ・信頼と協働の礎ともなる信仰
 - 信仰によって気づかされること
 - ・自分の信仰や行為を周囲に顕示したい気持ち
 - ・相手を「癒したい」気持ち
 - ・自分に都合の良い方向に相手を誘導したい気持ち
- ☆自己の心のずるさ等が佛の光に照らし出される

◆苦の臨床という「現場」は、案外、目の前にありながら見えず、多くの人が素通りしてしまうことが多い。如来様の光に照らされながら、無力ながらも精一杯目の前の人の苦しみに向き合おうという意識を持てばこそ、宗教者・佛教者として向き合わねばならない「場が現れてくる」のだろう。

・善き友に会い、善き縁に近づく

ある人が尋ねました。わたしのような愚かな身には、尊い御佛の教えを目にすることもなく、悪事に結びつくご縁ばかりが多いのです。どのような方法を用いて、悪に向かおうとする心をまもり、信心を発すことができるでしょうか。（『十二箇条の問答』）

法然さまがお答えになりました。その方法は一つではありません。たとえば、他者が苦しむところに出遇ったならば、自己が地獄・餓鬼・畜生といった三つの悪しきところで苦しむ姿を思いなさい。また、他者の死にゆくのを見て、無常の道理を思い知りなさい。あるいは、常にお念佛を申してその心を励ましなさい。あるいは、常に善き友と接して、い

たらぬ自己の心を恥じなさい。人の心はたいがい悪い縁によって悪い心がおきてきます。そうであれば、悪い縁を遠ざけ、善き縁に近づきなさいというのです。こうした方法は一つとは限りません。その場に応じてご判断ください。（『十二箇条の問答』）

罪深いわが身かもしれません。でも、開き直りの凡夫で良いと、法然さまは仰せになりません。善き友に会って自らを恥じ、できるだけ善き縁に会うことをお勧めになり、凡夫なりにお釈迦さまの仰せの通りに生きようと努力することを教えておられる

ただひたすらに念仏を申して、大いなる弥陀如来様にすべてをおまかせしてゆくと、その慈愛の光に照らされて、少しずつわが身の愚かしさや弱さ、悲しさに気づかされる。そんな小さな自己を認めるとき、多くの者の恩恵や大切な存在に気づかせられることもある。弱さや至らなさをみつめてみて、初めて人は成長するのかもしれない。

合掌 南無阿弥陀佛